虐待と その周辺領域 6

発達障害児の虐待リスク

橋本 和明（花園大学社会福祉学部教授）

近年、発達障害という概念が登場し、それについての理解や支援が広がってきている。虐待との関係で述べれば、発達障害のある子どもが虐待を受けてしまうリスクは高いと言われ、Sullivanら(※)の調査では、障害のある子への虐待発生率は31.0%と、障害のない子の実に3.4倍の高さであったと報告している。また、細川ら(※)の研究では、障害児であっても、身体障害よりも発達障害の方が虐待を招きやすいと指摘する。そして、杉山(※)の研究では、虐待症例のなかに、広汎性発達障害が全体の25%、注意欠陥多動性障害が20%で、何らかの発達障害の診断が可能な子どもは実に55%に達すると報告している。これらは発達障害と虐待との関連を示すほんの一部の研究結果に過ぎないが、これと同様の報告はこれまで数多くなされてきている。

いずれの研究からも明らかなことは、発達障害のある子どもの子育てにおいては虐待のリスクが伴ってしまうということである。では、なぜそうなってしまうのだろうか。発達障害を有する子どもの子育ては、定型発達児のそれと比べてそんなに大きな差があるのだろうか。

このことを論じる前に、まず理解してもらわねばならない点は、発達障害児は必ず親からの不適切な養育を受け、被虐待児になってしまうと言うわけでは決してないということである。子ども一人ひとりに個性があり、発達のあり方もさまざまで、仮に発達障害であったとしてもそれを一括りにして述べるわけにはいかない。また、わが子が発達の課題を抱えていても、上手に子育てをしている親もたくさんいて、その素晴らしさに脱帽することも多い。それを前提にした上で、発達障害を有する子どもの子育てについて理解しておかねばならないことを述べてみたい。

まず一つ目の特徴は、親子の愛着が形成しにくいことが挙げられる。たとえば、自閉症児の場合、自分の名前を呼ばれても振り向かなかったり、アイコンタクトが取りにくかったりする。親はわが子とコミュニケーションを図ろうとするものの思うようにいかず、子どもになかなか共感がわかず、ひいては子どもを愛おしく思いにくいという事態にまで発展することもある。なかには感覚の過敏さもあり、触られたり抱っこされることを嫌がる子もいて、「いつも丸太ん棒を抱いているようだった」と感想を述べられる親もいる。本来なら子どもは首がすわる頃から1歳になるまでの間に日常世話をしてくれる主たる養育者に愛着を抱き、抱っこをされる時は自分の身をその人に預け、抱かれやすいような姿勢を取るものである。しかし、発達障害のある一部の子どものなかにはそうしてくれないケースもあり、抱いていても泣き止まず、親としてはわが子が自分を当てにしてくれているとの実感に乏しくなってしまう。

二つ目の特徴は、定型発達児と比べて、発達のスピードが緩やかであるため、親は焦りや苛立ちを感じやすく、ゆとりを持った子育てがしにくいことがある。たとえば、言葉がなかなか出てこなかったり、トイレット・トレーニングが円滑にいかず、「他の子に比べてどうしてうちの子だけは…」と親が感じてしまう。わが子に早く言葉を覚えてもらおうと、親はいろいろな物を指さし、「あれがブゥーブゥー」「これがワンワン」と教えるものの、その子は親が指さした方向に目を向けず、まったく違うところを見ていたりする。そうなってしまうと、親としては育てる手応えが得にくくなる。つい焦りや苛立ちが不適切な言動へと向かわせることもあるかもしれない。

三つ目の特徴は、身体障害と違って発達障害の場合は周囲からはわかりにくい面があり、親自身もわが子の障害を見落としてしまいやすいことである。本当ならその子にあった配慮のある子育てが必要であるにもかかわらず、それがなされないばかりに、ついつい無理な要求を子どもに押しつけたりする。子ども自身も自分の障害に気付きにくいこともあるので、周囲の者ができているのに自分だけができないと劣等感を募らせてしまう。発達障害の特性は個人差が大きい上、それが持って生まれた性格の問題なのか、障害なのかの区別がつきにくいところがある。そのため、なおさら障害の認識に欠いた対応となってしまう。

ここで重要なことは、発達障害があるからといって、発達をしないわけでは決してない。定型発達児に比べてそのスピードが緩やかではあるかもしれないが、その子なりの発達や成長は必ず見て取れる。また、愛着の形成は築きにくいところもあるかもしれないが、その人なりの人間関係は確実に結んでいき、意思疎通やコミュニケーションを図っていくのである。そうなるためにも、発達障害についてよく知ることから始めなければならない。その知識や理解があることで、かかわりの手立てが生み出され、不適切な養育に至らなくてすむ。わが国の発達障害への理解や支援はまだまだスタート地点に立ったばかりであり、子どもを育てる親にはこのことが十分に行き届いていない面もある。虐待の介入や防止を支援する専門家が発達障害について広く啓蒙していくことが今後の課題といえる。

（※文献）

Sullivan,P.M. & Knutson,J.F.(2000):Maltreatment and disabilities : A population-based epidemiological study. Child Abuse & Neglect 24 : 1257-1273.

細川徹、本間博彰（2002）：「わが国における障害児虐待の実態とその特徴」平成13年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書、第6/7,382-390.

杉山登志郎（2006）：「子ども虐待と発達障害:第4の発達障害としての子ども虐待」 小児の精神と神経、46(1),7-17.